

大分県立竹田高等学校

関東同窓会 第20回総会・懇親会

と き 平成18年7月8日(土)

ところ アルカディア市ヶ谷

当番幹事 山下 千香子(昭50年卒)



大分県立竹田高等学校
関東同窓会
第32号

発行者・会長 佐藤映之
編集者・委員長 佐藤敏士
発行所・関東同窓会事務局
〒190-0002
東京都立川市幸町4-47-29
電話 042-535-3322
FAX 042-535-3322
<http://www.geocities.jp/kantohaketa/>

印刷・佐伯印刷機

●平成十八年度 総会報告

思い出すだけで胸の高鳴りを覚え、なんとなく気恥ずかしく「きやー」と叫びたくなるような高校時代。青春という時代に足を踏み入れたこのなんとも懐かしい記憶とともに浮かんできた卒業写真そのものの面々。あのころ若さを満喫しておけば良かったなんて今更のように思うのは何十年ぶりかであった旧友達との楽しい時間がそう思わせたのかもしれない。

さる7月8日(土)、第20回竹田高等学校関東同窓会が市ヶ谷で開催された。長権町も立休止、紫陽花の美しさを引き立てる曇り空の下、早朝より三三五五幹事たちが集まり始めると会場にアルカディアはすでに活気に満ちていた。今回の幹事は昭和40年卒の先輩諸氏、サブ幹事として我々50年卒の初心者軍団がお手伝いの大役を仰せつかったのである。当日の出席者は来賓

を含め2550名あまり、関東組の参加は勿論のこと、遠路上京された方々には頭の下がる思いであった。

12時より用正幹事長の司会、佐藤関東同窓会会長の挨拶で総会が始まり、会務・会計報告、監査報告、感謝状贈呈と進んだ。次に来賓の現竹田高校大塚守校長、同窓会会長の後藤孝昭氏、竹田市長牧剛氏と重鎮の方々からの心温まるご挨拶をいただいた。遠く長く故郷を離れているといはれ、我々の原点は竹田、ルーツは豊後の国である。故郷の小さな出来事に目を奪われ、心躍り、心痛むのである。それだからこそ竹田をこよなく愛し、発展のために尽力する方々のお言葉には素直に感動を覚えるのである。県東京事務所河野巧氏、大分合同新聞社金崎研二氏、近隣の同窓会より芦川光宏氏(高友会会長、秋月権親氏(上野ヶ丘)、江藤文一郎氏(鶴見ヶ丘)、後藤忠弘氏(大分工業高校東京支部)、生野茂男氏(三重)、坂井正氏氏(国東)、朝倉恵美子氏(三重農高)の皆

様の言葉。そして市商工会議所会頭甲斐正氏、市商工親善課長河野通友氏、竹田高校事務長長牧野徳重氏、同窓会副会長後藤真志氏、同じく堀幸子氏と皆様わざわざこの日のために上京して下さり会が盛り上がったのは言うまでもない。

総会終了後賑やかな懇親会が始まった。今回、第20回を記念し引田先生率いる竹田高校器楽部の生徒たち30数名にお願いいただいた。彼らの演奏する竹田高校校歌や竹田高等学校校歌は我々をすぐさま当時タイムスリップさせてしまった。あの頃若さだけで暴走(?)できたこと、若さゆえに踏みこたなかったこと等、誰もが懐古になったのはお酒の力だけではあるまい。青春というなんとも甘ずっぱい世界に身を置きながらも待ち受ける受験に困頓とし、もがき苦しんだ時代のなんとも懐かしいこと。30年前男子の誰かが恋をした天地真理はあつと一瞬間に色あせたけれど、恋に恋したせつない時代はいまでも鮮明に蘇り胸をきゅんとさせるのである。器楽部の女生徒たちの今も昔も変わらぬ制服姿を見ると茶髪、超ミニスカートを見慣れた目にはその清楚さが当時の自身(一)を思い出させるのである。幹事の一人堀田氏プロデュースの豪華で美味しい料理に舌鼓を打ちながらも同時に思いを馳せていたのである。

宴の終わりはやはり「ストーム」であろう。戦い勝てりうま酒をーと腕を回し円陣を組めば気分は最高潮!「ストーム」なってきた竹高を語らずに忘れてかけてた文高も回り始めれば出てくるではないか。思い起こせば行事の後にはいつも「ストーム」だった。歓喜も後悔も悶々とした思いも大声と汗と共にみんな飲み込んでくれた。「気力・闘志・根性」も今の子供たちにとって時代錯誤のフレーズなのかもしれないが我々中高生にとつては今でも輝き続ける青春のスロガンなのである。この日、燃えに燃えた(曲ではない)中年集団は元氣な大分弁で新宿を闊歩したのであった。皆様おひとうございませう!!



竹田高校ブラスバンド演奏でオープン

プログラム

(総会の部)

- 11:30~12:10
1. 開会のことば
2. 会長あいさつ
3. 会務・会計報告
4. 監査報告
5. 新会長あいさつ
〈新役員紹介〉
6. 来賓あいさつ
7. 開会のことば



牧 竹田市長来賓代表であいさつ



佐藤会長あいさつ

プログラム

【懇親会の部】

12:20~14:30

1. 乾杯
2. 会食・歓談
3. アトラクション
4. 当番幹事引継ぎ
5. 「校歌」斉唱
6. 閉会のことば

フォトで綴る!!

第20回 総会懇親会風景



20回 関東同窓会総会・懇親会



OBコック長による料理の説明



昭和26
31年
卒



「荒城の月」をはじめ名曲の数々をメドレーで演奏し出席者に深い感動を与えた



会場での大合唱



★これらの写真は竹田高校関東同窓会のホームページで、見ることができます。

<http://www.geocities.jp/kantohtaketa/>

平成十八年度総会報告と 平成十七年度会務・会計報告

創立二十周年に
あたり六氏に
感謝状贈呈

会長 佐藤 映之
(28年卒)

当、関東同窓会は、旧来の「在草竹田会」から竹田高校(旧竹田中学、旧竹田高等女学校、竹田高校)の同窓会としての態を構築すべく、昭和六十二年に分離独立、「大分県立竹田高等学校関東同窓会」として設立されました。先達が公私、繁忙の中にあつて古里を想い、母校愛に燃え創立、爾來、その意図は着実に継承され今日に至りました。今年、創立二十周年の大きな節目を迎えるにあたり、草創期に多大なご尽力をいただき、尚、



感謝状の贈呈式

かつ今日においても高邁なご助言、ご示唆を賜っている有智高才の次の六氏に衷心より感謝の意を表し粗品を添え感謝状を贈呈致しました。末長くご健勝でひき続きご指導賜りますように切に懇願する次第であります。

一、高宮 昇 (S8) 会長(初代)
一、後藤 鉄石 (S10) 会長(二代目)
一、渡辺 正治 (S14) 副会長
一、石原 田鶴子 (S14) 編集委員
一、伊東 七三三 (S20) 会長(三代目)
一、長吉 泉 (S26) 会長(四代目)

(卒年)(役職)

(任期)(現任)

一、相談役 H1~H4 故人
一、相談役 S62~1
一、顧問 H17
一、相談役 H4~H9
一、相談役 H9~H15

(敬称略)

会 計 報 告

収支計算報告書

(平17.4.1から平18.3.31まで)

1. 収 入		
①	維持総受給	1,841,000円
②	会費	1,688,000円
③	会費優待	76,000円
④	会費優待	7円
⑤	計	3,605,007円
	前期繰越	1,927,756円
	合 計	5,532,763円

2. 支 出		
①	総会費	2,436,180円
②	会報費	587,477円
③	会費優待	19,312円
④	会費優待	502,900円
⑤	会費優待	160,464円
⑥	会費優待	140,657円
⑦	計	3,850,161円
	次期繰越	1,682,602円
	合 計	5,532,763円

3. 次期繰越の内訳		
①	現 金	15,116円
②	預 金	1,667,486円
	計	1,682,602円

上記の通り報告します。

平成18年4月18日 幹事長 用正 靖彦 印

監査報告書

監査の結果、この収支計算報告書は、適正かつ正確であることを認めます。

平成18年4月26日

監事 坂 本 勇 印

平成十七年度

会務・会計報告

会務報告

●平成十七年六月十八日(土)
第十九回総会・懇親会

於 センチュリーハイアット東京
出席 百十九名

当番幹事 S39 年卒 S49 年卒
が担当

開会、会長挨拶、会務・会計
報告、監査報告、会則の一部
改定、新役員紹介、来賓挨拶、
乾杯

●(55年卒)の話と一門の曲
独奏

インフォメーションセンター
設置、郷土特産品コーナー設
置、出席者名簿士座

●平成十七年七月二十三日(土)

総会・懇親会の反省会兼懇
労会
於 アルカディア市ヶ谷
出席 二十名

●第19回総会・懇親会の総括
(当日は地震の影響で交通が
マヒ、出席者は二十名に止ま
った)

●平成十七年九月二十六日(月)
役員会

於 アルカディア市ヶ谷
出席 十六名

・秋の定例幹事会日程、課題
について

●平成十七年十一月十八日(金)
幹事会

於 アルカディア市ヶ谷
出席 三十五名

・第19回総会・懇親会の会計
報告

・第20回総会・懇親会に向け
ての日程、アトラクション

・維持会員及維持会費状況説
明

・平成十七年度、収支状況(概
算)説明

等について
・事務局長兼担当交代の件承認
●平成十八年二月十四日(火)
役員会

於 アルカディア市ヶ谷
出席 十五名

・春の定例幹事会日程、課題
について

●平成十八年三月十三日(月)
幹事会

於 アルカディア市ヶ谷
出席 十五名

・第20回総会・懇親会運営内
容について

・設立20周年記念会につき、
感謝状記念品贈呈、アトラク
ションは母校器楽部の演奏決
定

・平成十七年度、収支状況(概
算)説明

創立一〇年を迎える 竹田高校の「現況と展望」

大分県立竹田高校

校長 大塚 守



みれば、東大を輩出した「ブランド校」を指すことは明白ですが、その通過点として私立中を考えていることは言うまでもありません。

大分県でも私立中高一貫校が4校すでに開校しており、来年度には公立中高一貫校の開校が予定されています。

このような潮流の中、本校が本校としての独自性を発揮するにはいかにあるかを考えなければならぬのか、そのポイントは弱みと思われる「地方の公立高校」という点を強みに変えることだと考えています。

まず、公立高校であるということについて。

公立高校、特に進学校といわれる普通科高校には、文武両道を標榜して勉学とともに部活動や学校行事を熱心に行うという雰囲気は満ちあふれています。すなわち、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成が可能であり、事実この方面で大きな成果を挙げています。また、学力

には、「東大合格者の家庭力」とか「難関私立中でなくても東大に合格できる」といった記事は

揮させると、自他に対する見方が偏狭なものに陥らないで済むのです。同質の集団の持つよろさやよむさとは無縁の雄羊集団のしたたかさや国太さ——よい面をいかうことになりま。ストームの例を持ち出すまでもなく、大分県の高校の中で旧制中学校の雰囲気や現在に至るまで残している唯一の学校といわれる本校ですから、この傾向はより顕著なものとなります。90%前後の部活動参加率につきましてもはたして中途半端になるとの批判もあることは承知していますが、タフさ(人とコミュニケーションをとる力、自分を律する力、努力の後に達成感や成長があることを信じる力)を養う手段の一つとして、開校以来の文武両道の伝統を引き継ぎたいと考えています。それも、勉強する生徒と部活動のみをする生徒とに大別する「学校としての文武両道」ではなく、生徒一人ひとりの中で両立を展望して持ち続けて行きたいと思っています。

育成に努めています。このような外部からの支援を活かすために内部の充実を期さないければならないとはを固めているところ。問題解決は困難ではありませんが、不可能事ではないと認識しています。というのは、センター試験が実施されるようになってから入試問題がオールドファッションのものになり、取り組み方次第では難関大であっても充分に対応できるからです。単に合格させるためだけでなく、その先を見据えた学問的な香気の高い授業を創造していくこととする志向を教職員の中で醸成することが喫緊の課題と考えます。教職員の姿勢は必ず生徒に反映します。また、大学進学が第一志望でない生徒にとっても学問的な経験を受けた経歴は学力故の進路選択ではないうの自覚と自信の根拠となり得るであらう。

次に「地方」という点で。地方の最大の弱点は教育に限らず、情報が少ないことだろうと思いますが、このことについても「逆転の発想」が可能(特に高校時代という人生の基礎づくりの時期においては)。あることを成し遂げるにはその初歩の段階で集中豪雨的に対処することが必要であるといわれています。情報は時として集中力を阻害します。「一心不乱」は死語に近い言葉ですが、物事に対して余りにも分析的に間うろうとする都会人への戒めの言葉と読み替えることもできます。地方の高校で、地方の人々に見守られながら、ひたむきに努めたという心豊かな思いがもたらすものは何か、容易に想像できません。



臥牛祭 平成18年9月13~15日

会員特別寄稿

俳句つれづれ

河野 祐司(昭和16年卒)

俳句と私

衣食住足つて平和が続くと、何かと趣味を持ちたくなる。手取り早く安易に入れるとは思われるもの、最もたるものは俳句であり、猫も杓子もと言えど語弊があるが、文化、学識水準の平均して高度な日本人である。俳句の世界も、戦後には急速に発展して、現在、俳句人口一千万とも二千万とも言はれていて、その所以であろう。

その上世の中これ程便利になれば、専業主婦も、専業農家も、スイッチ一つひねれば、何もかも人の代りを能率よくやってくれる文明の利器が次々と現はれる時代、自づと余暇が生れ趣味に向ふといふことになる。紙とペンがあれば出来る俳句、その上頭の体操にも良いとなれば、これ程気軽に始められて実益を兼ねた趣味はない。戦後一過性のブームに終らず、着実に発展している所以であろう。

といふ訳で、私も定年後は中にもぐり込んだ漢字である。学校時代、国語漢文の嫌いな私が俳句を始めてから、かれこれ二十年になる。始めてみると仲々広く奥深い。興味の尽きるところがない。しかし安易に始めたは申せ、他に動機がなかった訳ではない。

それは、物心つく頃から父が俳句愛好家であり、自分の作った句を短冊に書いてたり折紙にしたりして、柱や床の間に掲げて楽しんでいたのである。

父の俳号と私の俳号

父は私の生れる二年前の大正十年満鉄(旧南満州鉄道株式会社)に入社し、一家で大陸に渡つたのだが、忙中閑を求めて同好の士と共に俳句を楽しんでいた。父は俳号を岡城といい、故郷の城の名そのものを頂戴していた。

この城が郷里大分県竹田市にある濃原太郎の荒城の月で有名な城であることは、幼い頃から家族の会話の中で知っていた。父が城の名を俳号にした経緯についてことさらに聴き質した憶えがない。厳しく無口な方だったから気軽に聴ける雰囲気ではなかったのだ

ろう。厳しい父ではあったけれど、私が小児喘息で苦しんだ三年目「満州の氣候が合はないのだらう、御先祖の郷里に帰れば病氣は治るといふから引揚げて帰ろうや」と四十

五才の働き盛りであったのに、あっさり満鉄を退職して郷里竹田に引揚げたのだった。昭和十三年三月であった。

大陸生れの私が、初めて見る父母の故郷は丸で別世界であつた。愈々重大な時局に入つてゆく時代であつたのに、緊迫感はなく感じられず、満州の雰囲気とは懸け離れて平穩そのもので、唯々驚きと喜びに溢れる思いがしたものだ

しつとりと落ち着いた城下町、静かに四方をとり囲む雄大な山々、美しい田園風景、町の音を或いは大きく或いは小さく音を立て、岩を打ち石を洗つて流れる清流稲葉川、何処を見ても一幅の絵であり、詩になる故郷であつた。やがてこの美しい風光明媚の自然の中に、心身共に沈め、溶け込ませてゆくことが出来たのである。そして、父が城の名をそのまゝ、自らの俳号にしたのは、成程大陸に於ける日々の生活の中でも、瞬時も故郷

を忘れない証であつたことを納得したのであつた。

其の後、日を経ずして、この城にもう一つの名の臥牛城があることを知つたのである。古い地図や鳥瞰図を見ると、正しく牛の臥す形をした丘陵の城であつた。

私はその頃中学生であつたのだが、もしも将来俳句を作るようになったら、臥牛こそ自分の俳号に相応しいではないかと思つたものである。漠然とはあつても少年時代の思いは、いつか長じて実現するものだとはよく聞く話だが、半世紀すぎてこれが実現した。今私が俳句を作り臥牛と号する所以である。

俳句についての雑感

宗教は一人一人のものであるといふように、俳句も亦同じ様に、短い詩の中に込めた感情は一人一人のもので、大げさに言えば個人の聖域だと思ふのが如何だろう。五七五の中にすべてを言い表はすことは難しい。ましてや何となく纏めた句の行間にも潜む心情を、読む人は更に難しい理解を迫られる訳で、なかなか無理な話である。人それぞれに、依つて来たる過去の環境

があり、背負つてきた経験がある。それらの過去の己の映像を通してのみ、他人の詠んだ句を鑑賞出来るのであつて、それ以外にはないのである。

私は現在三つのグループの句会に属している。一つは俳界の大家所を囲む句会、一つは吟行して互選批評の会、一つはざつとくらんの昔からの仲間、つまみ食いもアルコールも自由、忌憚のない意見論評・談論風発の互選の会、それぞれ句歴平均三十年を下らないお歴々が、誠に楽しい会である。色々な観点からの解釈批評がいただける、これ程有難いことはない。吟行は更に歩くことの健康と、見聞を広めるといふメリットも頂くことが出来て幸ひだ。

(作品は詩歌の欄で)

燃える!!

クラス会・同期会

二八会全国大会

飯尾 真弓 (S28年卒)

十月二日、パンパシフィックホテル横浜にて、いよいよ二八会全国大会の開催である。早朝の強い雨も、大分・福岡からの飛行機が着く頃には多少の雲を残して晴れ上がった。



H18年10月2日
横浜港 日本丸をバックに

各地区代表からの近況報告の後、懇親会へと進む。宴たけなわとなり、男性そして女性による舞踊やデュエット、学ラや白粉の制服姿の老年男女など、大爆笑の中、二次会へと突入した。

翌日は朝食後、バス二台に分乗し、市内を観光する。外人墓地、ペイブリッジ、赤レンガ倉庫等を訪れた後、中華街の重慶飯店での昼食。賑やかな歓談の中、次の大会予定が幹事より発表される。「1年後か2年後か、とにかく次は別府で開催することに決定した」とのこと、はたして今度は何れ位の人が集まることが出来るのであろうか。

二年前の久住に於ける古希の全国大会では百八十名、今回は百六名の参加、なんと元氣な二八会語氏であろうか。受付は三時から。昔の様に全て漆黒とはいかないと輝いている。かの有名な日本丸を背に、笑いの中で記念撮影が行われ、いよいよ開会となる。

羽田空港と東京駅行きのバスに分乗した友に、大きく手を振りながらのお別れとなった。一抹の淋しさが秋風とともによぎる。

何事もなく無事に全国大会を終えたことが幹事一同の喜びだった。一体、われわれ七十一、三歳の二八会員の結束力は何であろうかと思議に思ふ。「貴方たちは凄いわね」「どうしてそんなに集まれるの?」と時折、知人に尋ねられるのであろうか、それとも単なる祭り好きなのか? 何はともあれ、皆が長生きして再び会えることを心から願っている。

腕を組んで高らかに歌った校歌。皆の声が、今も胸に響いている。

昭和29年卒同期会

山口 雄三 (S29年卒)

が見える写真を、後日全員に配布することで汚名返上ができたようです。

大通谷で昼食後、硫黄の匂いの中を散策した後は、先の予定を気にする会員のために早めに山を降りることになり、午後四時以前に箱根湯本で部分解散、小田原駅で全員解散となり、後は親友グループがそれぞれの予定に従って行動したよう、直接帰郷された方は少数だったと聞いております。



H18年5月18日
於 箱根湯本水明荘

ふるさと名所紀行

しらみず
～白水の滝～

佐藤 毅士 (昭28年卒)



白水の滝本流

山と森と水の国日本は滝の宝庫である。日本列島の中央を馬の背骨のように走る分水嶺の山脈から、大小無数の川が日本海と太平洋に注ぐ。それらの川をさかのばれば、いたるところに断崖絶壁を落下する純白の名瀑を見ることが出来る。

環境庁の調査によれば、落差五メートル以上の滝は、全国に二千四百八十八あるという。大分県豊後大野市緒万町の原尻の滝はすでに「日本の滝百選」にも登録されて全国的に有名である。しかし「白水の滝」は深山幽谷の大野川の源流にあり、交通不便のためあまり知られていなかった。

因みに、滝は落下する形によつて次の様に分類されている。

- ①直瀝
- ②分岐瀝
- ③段瀝
- ④湍瀝
- ⑤懸瀝
- ⑥海岸瀝

以上のように大まかに分けてはいる。

白水の滝は年間ほとんど変わらない水量と湧水がい



白水の滝の説明板



白水の滝下流の茶店

くつもの岩間からほとばしり出ていることがあげられる。自然林に覆われた断崖絶壁を流れる滝は、落差の大きいもので三十八メートルある。かつては約百メートルにわたつて崖壁一面に湧水が飛び散り「日本有数の飛泉」とたたえられた。この飛泉が九十九あり、百に一つ足りないのが「白水」と名付けられた。滝の形が「善流瀝」であることから、富士の「白糸の滝」に比喩され「東の白糸、西の白水」と称せられていた。

この台地に、園藩主中川氏の建てたと伝えられる茶屋の跡もあり、江戸時代から滝見物をしていたという記録が残っている。滝はただ「見るだけ」でも十分に精神的、肉体的な覚醒効果をもたらすものであるけれど、「飛沫」や、滝に打たれる「滝行」という健康法などで自然の原点に近づきたいという現代人の願望があらわれているようだ。

記

○大分県竹田市萩町
○JR豊肥線 豊後萩駅から
バス約十分 宮平下車、徒歩
六十分
○竹田市から車で四十分

この台地に、園藩主中

訃報

慎んでお知らせ申し上げ、心からご冥福をお祈り致します。

物故者御芳名

佐藤 信人様(昭和2年卒) 没

平成17年8月

鈴木 昌子様(昭和9年卒) 没

平成18年3月9日

大坪 孝子様(昭和6年卒) 没

平成18年3月24日

佐藤 誠昭様(昭和43年卒) 没

平成18年6月4日

阿南 淑子様(昭和29年卒) 没

平成18年8月28日

佐藤 輝男様(昭和30年卒) 没

平成18年9月4日

幸何らかの方法により、事務局へ連絡を頂いた方々を掲載しております。



会員の皆様へお知らせ!!

竹田市発足一周年記念事業 秋・久住高原フェスタ開催

竹田市企画情報課

広報担当 吉野(平成3年卒)

(平成3年卒)

水上舞台での公演がない、劇団ふるさとやらばんにも、多くの観客が集まりました。

平成十七年四月一日に竹田市、直入郡萩町、久住町、直入町が合併し、新しい竹田市が発足したことを記念して、十月七日、八日を中心に竹田市発足一周年記念事業「秋・久住高原フェスタ」を開催しました。

雄大な久住高原をもっと市内外にPRするために、全国的に高原での開催は珍しい花火大会を大分合同新聞の共催で企画し、また竹田から世界を駆け回る和太鼓エンターテイメント集団T.A.O.の特別公演を招きました。

七日に開催した久住高原祭りと久住牛肉祭りでは、岡本地区の岡本寺供神楽、久住地区のくたみ太鼓のほか、県警音楽隊、熊本のピエントの皆さんのステージを見ながら、高原に並べた七輪で、この日のために下ろした豊後牛の焼肉を訪れた人に食べていただきました。

第23回新能は三年ぶりの



超満員の「竹王国」

詩歌・文芸

河野 祐司

(昭和16年卒)

孫の来て老妻は隣百柏餅

世事世俗一切無縁燕來る

欄外に初舞と書き日記閉づ

草いきれ喘息の子は遠ざけて

裏山の急にかすむや夕時雨

わが肩にうた、ねの人冷房車

後藤 紀子

(昭和28年卒)

初冬の竹の葉すれの御堂深く水月観音に会ひたてまつる

縁を切る祈りに燃えて女入らの合掌の手に似るかもみら葉

冬に入る鎌倉山の寂けさに耐えきれず降るもみちと思ふ

朝顔の花渡り来し涼風がまなこすすきて朝市の清しさ

朝顔の花群れ揺らす葦簀風ここは大戸入谷に候

あとがき

※「投稿」をお待ちしています。

この会報は会員皆様方の情報交換の場として編集しています。関東同窓会会員の皆様からの投稿を期待していますがその数が少なく苦労しています。お互い交流の場としてぜひ活用下さい。

委員一同

・投稿内容

- ①クラス会情報
- ②故郷の便り
- ③海外便り
- ④会員の語らい
- ⑤詩歌・文芸
- ⑥会員の催し
- ⑦会員消息
- ⑧その他

・連絡先

〒302-0034

茨城県取手市戸頭七丁目

七二二二〇二

佐藤 毅士 宛

(広報委員長)

TEL 0297-787774

FAX 0297-787774



